

増田寄郷拾箇村

縫殿村

里長 又兵衛

享保郡邑記小縫殿開村開字ヲ除カル家員廿五軒向川上

東々雄勝郡萩野袋村ト田子内村川ヲ境同下東南同郡熊野

洲村ト田子内村ヲ境田子内村稲庭川當地形内ニ落合 慶長

年中升田村住居小原藏人先祖ヲ開發雄勝郡内平鹿郡ト交リ

分々無シ雄勝郡田地ハ熊野洲村支御分ル平鹿村ハ増田村支御分ル

五輪羽場村家員廿二軒昔五輪有之故村名ニ唱此形ハ雄勝郡ニ

東ハ雄勝郡熊野洲村田畑入合南同郡三ツ又村ト川ヲ境西ハ同

郡戸波村ト稲庭川ヲ境少々々々 此五輪羽場村ト云々雄勝の

郡の地ありが田子内川流々して今々縫殿村ト屬スルハ

ころぬん、いり、古に五輪石と掘りしころ、此名ありけりハ

年子のくまの^{トシノ}バツのせう誰が^{いしやう}五輪ありてあるといふ

通覚寺

東流山^{まへハ藤柳}通覚寺ハ東本願寺寺直末寺なりて開基
釋祐讃俗姓ハ藤原少子^{山とちじり}ニ藤氏某ありとの本山ハ世々ある
蓮如上人が謁しよりて師弟子より法名を祐讃と付給ひ其時師自
筆の六字の名称を授典し給ひかゝて後長亨年中雄勝郡猿半
内村内河原より地を創めて一字の佛刹を建ぬゑりて後さび
増田の関ノ口よりて遷して其寺にて永正十五年戊寅七月廿
二日遷化ニ二世祐念住職の年月不詳天文八年己亥三月二日
化ニ三世祐安住職の年月不知レ永禄五年壬戌六月七日化
四世祐明住職の年月不知レ天正十五年丁亥十二月廿五日化

五世祐續此五世間増田村の関ノ口の住居ありて慶長十六
年辛亥某月小京縫殿之介吉実の母妙教禪尼の志願よりて
今ハ縫殿村に移り一字再建し慶長十八年癸丑八月七日化六
世祐西住職元和年中本山十二世教如上人師影堂師建立し付て
累年在京一勤勞の功を賞し給ひて真向の尊像を祐西授
け給ひ寛永十六年己卯正月廿二日化七世祐徳住職の年月不知
横手西誓寺に連枝祐西養子に延寶四年丙辰五月八日化
八世祐圓住職中寛文十^十年寺號師染筆并領同^子三
年小本像本尊頂戴延寶二^二年宗祖真影頂戴同^三年六
上宮太子セ高僧ノ真影頂戴皆是寄進主河村正五門主
婦法名了圓妙壽ニ祐圓貞享三年丙寅十月十日化九世

祐存住職年中不詳元禄十三年庚辰八月廿日化 十世是三位職
年中不詳享保二年丁酉六月廿日化 十一世祐信住職年中不
詳正徳三年癸巳二月廿日化 十二世祐玄住職中正徳四卯年蓮
如上人真影頂戴同六卯年飛檐ノ間出仕御免享保十五年
庚戌四月廿日化 十三世祐天元文三年壬午本山継目位御免
寶曆年中殿堂庫裡大門建立同十三年癸未七月廿二日
化 十四世天瑞住職中明和八年癸酉年鑄洪鐘 安永二
年本山継目飛檐位御免寛政年中庫裡再建 文化
十酉年境内ノ鎮守聖徳太子堂建立享和二年壬戌閑
居于今存生 十五世祐寛現住 寛政十卯年本山飛
檐位御免享和三癸卯年入院

小原縫殿ノ父吉実ノ母釋妙教禪尼 元和二年丙辰正月廿八日
縫殿ノ父吉実寛永十三年丙子九月十四日卒法名慈得院夢
英宗清居士也 小田縫殿ノ父吉実ノ奥州和賀ノ城主
多田薩摩守義忠の家臣也 永慶軍記廿五卷ノ中
多田亦次郎病死して亦四郎一人也 此亦小原左馬ノ
筒井縫殿ノ父猿橋弥八三人の外也 此等ノ名
名ハル氏ノ名ト云フに非ズ 一ハ云フハ云フヤ
ハマノ事ニ

八木村

里長 勘兵衛

享保郡邑記ニ家員四拾一軒南栗ハ雄勝郡戸波村ト大川
ニ境寛文十三癸卯郡奉行見分ト土民云大川下同郡岩崎村
草刈山境ハ大川中同断云々ト云々ハ木々地名氏云々ト云々
え々倭名抄近江國愛智郡八木拾枚抄宿祢部尾張又船木
八木云々秋田郡ハ木橋谷橋云々是ハ木ハ木ト云々米ト云々字を
割ワケて村名ト云々ありト云々ハ木々米ト云々玉勝間六巻ハ木
米ト云々ハ木ト云々云々ト云々小右記の寛仁萬寿のころハ木
十石ハ木廿石也見と云々ト云々又保田ハ木氏あり此ハ木氏ト但
馬宿祢後胤ト云々ハ木ハ左衛門尉某ト其ト云々ト云々佐竹昌義公常陸國
小入コノ給サマじミト云々皇都ミヤトト云々仕来ツカヘマツト云々家士ト云々家隨トシモノト云々家ト云々

海草より八本よりあるものあり谷本より出たる譚海より八本よりあるもの相州三浦の海邊より出たる奇怪の形に其良の義あり去りたる真の如く又多くは鰯を編みたるにして紅花の色に二三尺三寸及びそのありし海産物より席上置て玩ぶもの一漢網小かき取らるる損じ安し全形のものより水に潜り入るる水中より采るる如き水を競うる如くわさう鉄襪の如く根ハ石で帯てありしよりあるき長物語あり八本よりあるものいまいりてある八本村に在りしものいまい小笠原義父の居城函之也りて義父の貞治の事の人や仙北郡金澤、八幡宮奉納書寫、大般若經六百卷ある卷の末、貞治四年七月日大願主寛淳取筆、小笠原義父、四十六歳ありあまの一人あつてある経に記すを

寶龍權現ほうりつぜん 社祭日九月九日別當わかたけ 此村このむら 小俣こはち 別當わかたけ としてせしふ男子七八歳より十四歳までは是をつとむ
十六歳むさふ 小俣こはち といふこと 童子わらわ ぶゆつまゐり 男おとこ といふやあれ
そのさへ伊勢のお子こ 良子らうこ ぶゆつまゐり 是こゝ にもあらず 俣別當はちわかたけ
水神社 祭日四月九日 別當御役人 といふをつとむ

上ノ河原
中きまひ
うしろ野
あんのあへ
中きめぐ
野中 中野
新田^{シニタ}境
いろ々田
上八本
あへ川原
八本川原

清水

樋

すざあひ

田中

家負四拾七戸

人数二百廿四人

馬負廿六足二

此邑は佐藤長玄馬より舊き家ありそが家くやう
けつる家譜ありそがそが此奥ふのそが

出羽國平鹿郡八木邑佐藤長玄門 家系越後國より

出羽の平鹿郡より来り五代より及ぶより

佐藤家代々よりけしと車より文字と付る當代と地車と画

丹波サ将より花色地車より文字と白く染ぬより

馬より幡立物と花籠と花薄之幡とた幅白く布紅色

つ籠と銘金色のいそぎ

幕の紋と琵琶之是録足公より丹波公より琵琶

よりして佐藤家代々よりけし幕串と七本九本十二本より

右之條は為秘事間必相傳有問ある者一之巻物

候得共お傳やい他是有りまふ

永久元巳年七月十日

佐藤主計尉藤原忠藏

佐藤教負少藤原忠秀

佐藤丹波少藤原忠兼殿

淡海公是より關八州七藤原分ル——濱ノ藏王——

佐藤庄司信秀もまの藏王より十六代の後胤之奥列五十郡の大將之居城則仙代之嫡女泉三郎に嫁ふ子二人あり

二女藤原高師に嫁ふ子四人あり

佐藤三郎兵衛尉次信源平合戦に義經公能登守の御手か命あやかりしとき次信市馬の前かかけあがりて死せり

子一人あり長男義信十六歳より九山一戦のとき大將より九山の居城追討二十九歳時仙代伴達二郎追討せり

佐藤四郎兵衛尉忠信兄三郎兵衛次信八嶋多人の浦よりち北の節能登守を一矢よりみりさんとはかけりて終に逃ひ

せり能登守より内なる王と存せり出よりつらありせめて此よりハ

りしよりちれて兄次信の靈前より向せり四人張より十四束より

なりかのつらみのむき口で血けりきて射り其時能登守より王が

首を捕らせり上帯をえり船庭に投り入るれりとき死にたり

吉野山より寛範より捕り事日おくれり子二人あり

嫡男義忠十六歳より義信同前より九山より一戦同十八歳

伴達次郎より追討せり

佐藤太郎忠清仙代綱宗公関ヶ原一戦のとき伴達居城所有

之佐藤の一家より名を承りて伴達兵部少将にあり

二男より別佐藤の家を継ぎ是より佐藤分る来り

佐藤出羽守忠光嫡男佐藤兵庫守忠明居城仙代

二男 佐藤藏之亮忠定 越前乱国の時宰人トリ
関末のより佐竹冠者小市奉公其頃一カ石ニ

嫡男 佐藤源左門尉忠恒 同國ニ住ス

嫡男 佐藤源十郎尉忠吉 同國ニ住ス 是より佐藤

源左門尉忠重ニ継ぎ来り代々佐竹ニ居ルニ

三男 佐藤帶刀尉忠政 青野ヶ原合戦ニ浅野筑後守藏元と

追討しそへし越中の國ニ下置ニ感状所持ニ

嫡男 佐藤主馬尉忠行 同國ニ住ス

三男 佐藤主計尉忠藏 越前より五百石大畧朝群陣立の節

廿歳より所供二千石所感状あり

三男 佐藤敦員尉忠秀 少し家よりて宰人トあり最上ニ住ス

嫡男 佐藤丹波少忠兼 同國ニ住ス 永澤影勝公越後一戦の

砌成田帶刀と打たるに永久四年丙申四月七日ニ

三男 佐藤平藏尉忠友 庄内ニ住ス

嫡男 佐藤主膳尉忠閑 同國ニ住ス

二男 佐藤民部尉忠父 少し家よりて宰人トあり戸沼能登守殿

十八白石よりて出せし

三男 佐藤平九門尉忠房 戸沼能登守殿一多より宰人ト

成りて仙北ニ住ス

嫡男 佐藤平六衛尉忠光 同國ニ住ス

三男 佐藤清九門尉光信 出羽仙北内角館百石ニ住ス

三男 佐藤傳右馬尉信將 津輕へ宰人トて
信濃守殿百五十石よりて今ニ在リ

佐藤次左門尉 同國小位

致平地事ニさしづまの主人のときハ
琵琶ニ委細羊巻物あり

方々條々依藤家代々如此経来ル一家二門あり
傳の秘事ニ世間々依藤を名来者数多きあり
此中其取々サリ岩来り来者是なり依藤の名字
可あり者以上

依藤丹波少藤宗忠兼印

寛正四稔歲四月十六日書之

依藤千藏尉藤宗忠友殿

と見えしつゝかくも可なりと云ふは實に

二井田村 里長 石川伊左門

享保の年々々新田々書き六郡の内ニ新田二井田仁井
田ありたり多し此二井田の西方ハ岩崎川中ニ境あり

神社

新山権現社 祭日 六月二日 別當 増田村修驗圓満寺

稻荷明神社 祭日 九月九日 別當 並同寺ニ

田地字

久毛津の柳

又久毛の柳ハ本村の南の方ニ在り
増田村ハ本村ニ井田村入會り地ニ

事々々神々々座々供物々々けり
ありしなり

ありしなり 大道東 村北に在り

十五堂村の南ニ在り 禪刹ニ
桑門寺誰々あり

職

能家散五拾戸 人負二百四十八人 馬數十九足

産物

二井田笠 二井膏とてあり六郡の土毛をまひの番附として
出さる小二井菅笠あり二井田膏藥と山内氏の家傳金傷切
瘡の痛で止むの妙ありとも軍中の用藥にて多く金瘡のと
まへ此山内氏と永慶軍記に土肥二郎同郎等と山内主殿安部
土郎左門小田宗宗左衛門など先づしてとる此山内主殿の後胤
山内孫重とて今も家伝にありと上祖も持傳とる古記祿古書に
さう稱するにそふ源九郎義経もがかりてとあるが、この
書伝ふまゝのちやうと、幕して此奥に載して

平鹿郡 二井田邑 山内孫右門家藏

系譜

往昔増田先祖從鎌倉御下着之砌阿野澤田殿土肥
山内四人お下りて今も陰に傳代お傳へる雖
も末葉は一類もふて退轉とる

お次茂幕 文居市子并 森お枝や 左興
お又二代お折良何ぞ澤田右興 山内加馬興丁
為多、このお前代 衣お宅のめけや

元龜三年 大改 三の吉

藤原朝臣 山内

湊友三右衛門尉

光實

任之

之龜三句

天家
壬申

二春 十六日

此家々八幡宮の夢想として陣中小金瘡愈ル
膏藥で境の鉢を煉う今此家の婦女
傳之に於て妙なる膏藥をうてい
又九郎義経いまだ丑若鷹といふそのやう
十二歳の年より一巻のり菓子
うふれやうそが中文字のあやほりあ
此君稚くおいらと似あはるる語もつむり

丑若鷹十式若時

書之也

大鵬

一 大 龍 界 之

之 也

權 之 哥 之

之 也

一 如 之 的 的

之 師 之

之 也

一 廿 秊 爲

法 二 三 四 五

二 廿 秊 爲 法

一 廿 秊 爲 法

一 廿 秊 爲 法

一 廿 秊 爲 法

一
酒
の
流
之
也

酒
の
流
之
也

一
酒
の
流
之
也

酒
の
流
之
也

一
酒
の
流
之
也

酒
の
流
之
也

一の山へ

湯松

一ノ山へ
丸のたし

三ノ山

一の山へ
丸のたし

一の山へ

此御曹司丑若磨の書より由來ハいつのころより陸奥の國一城
の主は頼幸大納言某より書帯の僧領主領地のおいて
娘三人ありといひて出羽の國へ来てゐるなり小娘を嫁しめ
て廿年郡増田郷より山内氏へ嫁しめぬとて後ふみちのくは

城主より使ありてゆへに飯に給ふその時記念して此より若磨の書
一卷と未女の名もふ録しあるとけしと云い傳ふも 卷中か牛若と
丑若とありて衆もきり此大仙言の傳の事と考る陸奥國、平泉衆
は家々大仙言の傳をきつての處にてせよとのことと在りて十八
歳計ある傳と老母のいひて町よりいひ傳ふ、いひてこといふとす
うううきりされたるのふりあるとてやあけけい、

古内村

里長

長助

本ト古内ナといひて近き世より本ト文字ナ者ナ有ナる

享保日記家員十五軒雄勝郡前大川限り境寛文三年郡奉令

新古内村新田村家入文にも見えり此邑七町計南と飲食川

流ミナト

神社

新山大権現

祭日 九月九日 別當増田村修驗圓満寺

神明宮

祭日 四月十六日 別當 同

稻荷大明神

祭日 六月十日 別當 同

田ノ字

前田

後田

くさ漆い田

せきさ田

鈴振田植田村に属

新山田

神田町

沼上

のむらと沼

水後

いり敷

年中佛刹回祿して二三四世の間稽しふ所よりして
 五世で中興せり五世岩應寶永二年乙酉八月廿七日遷化
 六世元貞享保二年丁酉十月廿四日化 七世快傳明和
 九年壬辰安永元年八月廿日化 八世宥興享和二年壬戌九
 月十日化 九世永典文化十一年甲戌七月二十日化 十世
 當住宥隆之

八幡宮

祭日

八月十日

同

軒

條

里長 仁兵衛

新古内村

里長 仁兵衛

郡邑記小家負四拾軒雄勝郡岩崎村手前大川ニテ境ニ

神社

八幡宮

祭日

八月十日

神明宮

祭日

同日

此三社御中齋主ニ

稻荷明神

祭日

同日

田ノ字

おんせきそひ

上河原

あゝけり

沼のこへ

八本さうい

塚のうへ

薩蔓イモ

あーや

乾揚アガリ

田

総家負廿八戸

人数百八拾八人

馬十九足ニ

水神社増田村の麻當山の内小座り祭日音別當亀田千手院山
根小岩切り水樋あり一角堰よりそら一角坊より山伏より水田の
事小ユミあり此堰で壅り田佃りぬ其一角坊の舎退轉後より
亀田千手院より仕まつる古より一角坊が別當ありしより
麻當開邑ハ一角坊が次男齊藤市左衛門が祖の創めよりなり

田地字

南はきは

総家員廿九戸 人員百廿五人 馬負十五疋

上亀田村

里長 源兵衛

本郷の亀田より亀田より小多うる石あり此村
小千手院より修験者舎あり 寺枝御あり

稲葉村 上関合村 鷹野橋村 半助村

樋場村 平麻村 澤口村 亀森村

倉狩澤より村あり退轉あり

神社

神明宮 亀田村より祭日六月十六日別當千手院
正一位稻荷大明神あり祭日九月十日別當同
愛宕社 澤口村の山上より祭日六月十四日別當並同
八幡宮 上関合村より祭日八月十五日齋主小原治久

稻荷明神社 平麻村小座

齋主 庄左衛門

子安觀世音社 樋口村小座

齋主 勘之丞

田の字地

箭作 香海塚 寶池谷地

虹、澤、小延小經塚あり此經塚よりあつて内へ枕
字書し石の坐よりいひつゝ僧の某經や也、塚よりけし
女神森 男神森より御神と云ふ陰陽二位の神
神の神飾と唱ふ森むり、此地小家どもありてそこより
出づりてとて亀、森村より倉持澤のよりあつて神を
亀と村名かうつゝ唱ふ事なり傳訓森小かの實と云ふ

義通より日本記小亀石、郡より傳名鈔小神石、郡より書す
神代々鹿トそ後世と亀トとたつて傳名鈔も神龜と云ふ
甲と神龜と云ふと云ふさうけい、神の森と亀の森と云ふ
取つてぬめりぬきまのぬきまのぬきまのぬきまのぬきまの
ニ貫極 海極極 せんおんくさう海のニ蓋と云ふと云ふ
ひりま岩の上へ古本の極ありと云ふ古通ありといふの波渡の
街道ありといふものむり源九郎判官義經假山伏にて人
を安んずるやつゝ旅をいひて陸奥におもひき給ふと云ふ
体いおけりせりといふ小山の堀ふと云ふ極のとてに
いふ人といふやうぬきつゝてあな海の花やと云ふに
小童の此花やと云ふがせけい、氣と云ふ武花坊の

ひきておきけりや大なる極は枝を多折りて来ていさ此花を
りし後このやうに人も已給とてち詰ひおゆひとらつ
れ緒とあめ安と拭ぐ金剛杖をつき立て出づるとき齡八十
まゝの石根様の枯枝のまぶりと杖よりかぎりおひ来と
いゝ客僧達よあまゝ極とあまゝ折ぬとみり給ふ
まゝこゝろ神を命と朝夕かえつとさくさくおまゝはりてこ
してまゝふりの杖よりちやてうゝみもや返けき居るぶ
人ゝそのはさばりの杖より擲とるゝもゝるゝ方ふこゝろてまゝ極
うちぶれと箱とつゆ耳ももず入ぐさらば償へ給とて其ま
白銀の孔方一貫を安座よりちやて箱とあまゝ極とち
見ふある客の花邊人よりちやて笑ふまゝ一貫文のあまゝ泉と

出せば箱よりちやて錢幣よ其貸していゝとけいゝるゝ
もこのば武藏坊今一貫とてでもむんぐの山伏に是と備
ゆれと給とてふれとてちやてあまゝ極とてゆゝまゝといひ
三貫の極はち折つゝ極の枝も箱よりいゝとふちちうけて
山陰ふ去ぬ人ゝちやてあまゝ極とて箱よりいゝと高田はち
のやうて足すんば家よりいゝとあまゝ極とて去れ
三貫文の錢を吉本の極はちとらにゝとちつゝ極の枝も
股ふかりてあり人ゝ下り来て居る詰るゝ義徑すおまゝ給ひて
そと神の極本の神靈とてこのけいゝとちやてみらぬと
き給ひとあまゝとてちやて三貫極とて詰けきとていゝと
の今一世うけて強々此事あまゝ極かりてふ二巻きの書ものせり

家負八十四戸 人員百四十人 馬負五十疋

下亀田村 里長 彦右衛門

上亀田も凡同じ色之近き小保正と別におるなり
下所村在城村館屋敷村 金野川村 三河村
阿弥田村

神社

稻荷明神社 金野川上座 祭日四月五日 齋主 長左門

田字地

在城 平麻端 道祖神 福田

香最寺

本翁山香最寺古此色小ありしを今も明澤村に入
さるなり明澤の香最寺といふ

家負四拾九戸 人員二百十一人 馬廿一疋

明澤村

里長

吉太郎
久石衛門

明澤と古名赤澤といふ享保日記に明澤村家負廿六軒

下々町村同一軒 館屋敷村同四軒 関合村同拾七軒 金野川村

同五軒先々竈田分計住居いゝ居る要小寛文年中明澤村地

頭横手給士石井弥左衛門忠進開いゝ故明澤村者之込也

附北云々先年明澤村地形内竈田村より開いゝ村居る也

忠進開相成明澤村百姓五軒移り由竈田村より取立金野川村

間此未明澤村に鎌野川に唱へ不申明澤村に唱へ様可仰付候

と見え 枝郷澤口村家負七軒と見え 今も明澤村

家廿三戸 関合村同十六戸 支郷 金野河村同六戸 支郷あり

館屋敷下町澤に此の村退轉し枝郷と堀合金野川二村の之

明澤山獄より高山あり本末未詳と云て明沢と古く轍吏の栖つ
処とや阿氣安祁津の如く山の山獄との岩窟小住と云ふ
不膏添あり房中山昔物語 山本郡監國修験者
華藏院縁起あり 阿計徒磨阿
計留磨阿計志磨阿日高見山と住し事見え此明
澤山の麓に古城の跡あり寶音寺の跡あり池あり一とせ
此池水涸て碑出たりその石面に飛梵形あり四時順收と中
あり右小凶賊降伏左小邦内豊饒とあり右峯小藏王権現ま
ず北小地獄澤とありて六道の預天賀放光王金剛願金剛
寶金剛幢金剛悲心どの菩薩やも急流ノ沢には大悲觀世音
と安置まつ八ヶ山後の暗川澤に年の鬼神住りて侵し侵
塞鬼神や降伏し藏王の神形や齋ま給ふといふ女人の奇事と

忌み禁め男も酒肉を禁みて七日の齋火ふ身と清淨きて峯にたむ
し御嶽精進ふむと古野と云ふ山に人々金峯山
大権現と云ふと全化僧歟と云ふ山に宮持のあり世
と明澤の唱ふと云ふ山の北に高山の才一のや高と或説ふ
いふに竹山の仙人名馬と御嶽山の塩湯と小畝と給ふ此龍馬
かゝるやと云ふはわやと云ふその駒と放ち給ふと駒と獄と
ふまに鞍置給ひ地と馬鞍といふといふ

曰く龍の不動明王といふ此龍の中へ米搗音といふ此村に豊
饒といふ人曰く龍の山に不動尊や臥ありと云ふ此むきと龍の
やと云ふと云ふ米搗音とて曰く龍の谷のて後村に田圃との
らむといふの如く誰か寔にやと云ふといふ

藏王權現神像 大和國金峯山の砂金を以て神頭斗鍔と

内小収て理元大師の由手つゝ作り給ふなり

同神木像一軀 大治二年丁未五月十六日理元大師御作に

觀世音 五番札所 教圖阿闍梨作

峯からむふくははつど分はれ 永承七年三月七日

佛のちいひの月の

どスといふとも六部の寺巡りてけの像を宇治物語に見えしに

多門天王一軀 閻魔王一軀 脱衣婆の像共の圓

仁大師の作なりとて傳ふ

棟札小十時寛治三年己丑九月十六日 沙門當山坊主 法印金化

くりのつゝ神の宮居の山のきば

そぞ思ふにの海の月

一遍上人奉仰共小

熊野牛王一遍上人 自筆ありて其細に

大峯山 湯殿山 此兩社土小扉を埋む年号ありて其入

の建立といふ事なりとて

奉造立藏王大菩薩垂一字沙門禪性

元亨元年酉七月十八日

施力丹後

此兩社の社地の土中より掘り出さるるもの如く嶺上土中に收じ

奉納法華經廿六卷

武藏坊辨慶自筆に

文治三丁六月八日

油壘坂いづこも高山に在る名に當山の傍にありて其

并慶月参せしとき掌や四よりて手燈の行ひて金に其坂を

いづつも掌の油をこがしてとふいふなりとていり

梵字石經一字一石法華一部

月泉奉納之

應永十二配五月一日

やとふの山々へはあつた末お母に法を授けいふ 月泉

奉造建金峯山藏王権一字法印得岩

願主 弥人 禪光禪門

永享五年丑五月三日

奉掛金峯山額天長地久祈所

法印得岩

同八月十五日拜領之

藏王権現、額ハ院家金剛王院前大僧正

真輪

永享五年丑五月三日

當山舊例より正月十八日山初より登山ス

五月十八日

御焚祭 九月廿八日大祭之同廿九日山仕舞より國家安全
村民豊樂の祈祈禱あり

仲夏の同行事 天下泰平五穀成就護摩修行

不動尊金佛一寸八分弘法大師作 道場本尊微内を

さあさうの祭

正觀音一軀小野寺式部義行奉納多武峯の觀音

とふ

奉建立弥勒堂一字 別當 得岩

奉建立金峯山藏王堂一字 鬼門 鎮護 城境堅要

天文元辰^壬四月日 土井道近 別當 能定防

奉納神鏡一幣武威長運祈處

關口能登守道行別當梅方坊法印金鉢

奉立願開田成就祈處柴崎山後仙上浦の内赤沢村肝煎

二世羽仕現衆 大治四年己酉六月八日 五十八歲化

三世羽峯龍白 壽永元年壬寅四月廿九 九十四歲化

四世峯永白天 治承三年己亥九月廿五日 五十一歲化

五世省雄明交 建久九年壬午三月十三日 行年不知

六世大雄善甫 貞應元年壬午七月朔日 行年不知

七世通山清景 寬喜二年庚寅六月十八日化

八世省嶽海了 寬元四年丙午四月九日化

九世省二天全 仁治二年辛丑十二月三日化

十世省作現光 文永十年癸酉十二月七日化

十一世省智正白 永仁五年丁酉正月廿八日化

十二世省經善性 元亨二年壬戌八月八日化

十三世山迴梅山石 曆應三年庚辰六月八日化

十四世連山前岩 貞治六年丁未七月廿日化

十五世山了峯岩 應永八年辛巳二月六日化

十六世省住文樂 應永三十二年己巳六月廿七日化

十七世中興省金常得石 寬正元年庚申十月八日化

十八世省音得真 明應七年戊午十二月十六日化

十九世山圓正二 永正十四年丁丑二月廿九日化

二十世天真能定 永祿九年丙寅三月廿日化

廿二世金鉢梅分 慶長八年癸卯八月廿七日化

廿二世紅實延覺 寬永十二年乙亥五月朔日化

廿三世省道峯順 延寶四年丙辰五月十九日化

廿四世再中快峯林正

正德三年癸巳二月二日化

廿五世涼永石本

寶永七年庚寅十月廿五日化

廿六世省涼光榮

享保十四年己酉九月廿日化

廿七世省甚大教

安永六年丁酉九月廿日化

廿八世省永峯春

文化六年己巳七月十三日化

廿九世省榮正善

文政二年己卯三月廿八日化

三十世當住峯善坊

香最寺

本願山香最寺八曹洞派之相模國小田原海藏寺末
院之開山大洲梵守和尚大永五年乙酉八月廿四日遷化

二世照庵祥周和尚十世連山刈巖和尚世寺回祿遷化

年月廿三日化三世午祖和尚四世幻宿榮茂和尚五世

靜室禪林和尚六世持水石智順和尚七世南山業刈

和尚八世蜜刈祖龍和尚九世雷庵幽巖和尚十世連

山初巖和尚安永五年丙申九月廿日化十一世治寶萬明和

尚寬政八年丙辰十二月六日化十二世活岩卓禪和尚明和三年

丙戌八月廿二日化十三世明宗德禪和尚明和六年己丑二月

廿四日化十四世不照破鏡和尚寬政三年辛亥十月五日化

十五世靈嶽瑞苗和尚寬政四年壬子正月廿八日化十六世

壽嶽良山和尚寬政六年甲寅五月廿二日化十七世全應

和尚十八世禪光和尚文化十四年丁丑

正月廿日 十九世秀岩和尚文化五年辰正月廿日 廿世
傳附天壽和尚文化九年壬申四月廿八日 廿二世智覺大亮和尚
文化九年壬申五月十九日

陸奥瞻澤郡衣川正山寺當山香嚴寺末寺ニ

田地名

北野 平林 館中 惠庵中

追ひ敷 塚 比良の平 蓮臺野

堂の前 山の名

山館 古館 御士館 袋澤 鷲の澤 嶽比良 丹後端

小松倉 姫小臺 未鷲森 藥師長嶺 清水ヶ臺 金堀り澤

大鉢森 手代木 小鉢森 割ッタゴ ちものぶ

新比良 地獄澤 空澤 母澤

古樹奇木

箭倉松 姫松 丹後端の澤あり

龍骨由来

明治の枝師金野川村おむむー羊恭とふ人増田村
山中空無海あり男ハ此羊恭と兵術の師と頼みてその山に
巻いて近き世まで持ち山中に龍の鏡ありふりあり九
百一尺汁中の石あり知れずハ弱ハ知れずーいりあやき
此鏡より羊恭の首貫ひりり羊恭をさふ不熊谷三郎
兵衛へ慶安のころがしりサ道ハ此地に潜て修きりま

